多治見市文化財保護センター企画展

高田徳利

～高田の窯屋と小名田の商人～

【はじめに】

明治時代から昭和 20 年(1945)頃まで現・多治見市高田(たかた)地区および小名田(おなだ)地区で生産された「高田徳利(たかたとっくり)」は、鉄絵具や呉須によって酒屋の店名や屋号が筆書きされるという特徴をもつ。高田徳利は、酒屋が客に貸与し、客は空になった徳利を酒屋に持って行き酒を買うという用途から「通い徳利」あるいは「貸し徳利」ともいわれる。また由来は不明であるが、高田徳利を含め器面に文字が書かれた通い徳利は「貧乏徳利」ともよばれ、近代の貧乏徳利は高田と有田、丹波立杭が三大産地として国内流通範囲を三分しており、高田徳利は琵琶湖の湖北地方を境に東日本一帯に流通した。高田地区が徳利の産地となったのには、高田で「白粉土(しらこつち)」といわれる良質の陶土が産出したことが背景にある。一方の小名田地区でも徳利生産は行われたが、高田ほど良質の陶土に恵まれず、生産量は少なかった。そのような背景もあり、明治時代以降は主に高田の窯屋（製陶業者）が高田徳利を生産し、小名田の商人が販売するという構造ができあがっていったとみられる。

高田徳利は大正 12 年（1923）の関東大震災直後、一時的に注文が殺到し、江戸時代以来の好況を迎えたが、わずか数年でガラス瓶に押され需要が減少したとされる。その危機に直面し、高田の窯屋は網足(あみあし)や湯たんぽなど徳利に替わる生産品を模索する一方、小名田の商人は盃や小皿などに店名や屋号を入れた商品（印物(しるしもの)）を販売する「印物屋」へと転換をはかっていく。本展では、近代の高田徳利の生産と流通の歴史を紹介するとともに、徳利の需要減少に直面したとき、高田と小名田の人たちが生き残りをかけてどのような道を選択したか、窯屋と商人それぞれの選択にもスポットをあててみたい。

1．江戸時代の高田・小名田の徳利生産

▲江戸時代の灰釉徳利
高田大ザヤ窯跡出土
19 世紀中頃

高田・小名田で徳利生産が盛んになるのは 19 世紀代（江戸時代後期）のことである。この頃の高田・小名田産の徳利は「貧乏徳利」と呼ばれ、文字書きのない無文のものが製造され、出荷地の江戸で釘状工具によって酒屋の屋号などが彫り付けられて使用されることが多かった。江戸で圧倒的に需要があったのは容量三合程度の小形の徳利で、飲酒の習慣が広まった下級武士や町民などによって、その日飲むだけの量の酒を買うために「貧乏徳利」が盛んに使用されたとみられる。

江戸時代後期の高田は幕領、小名田は旗本・釜戸馬場氏の私領と支配者を異にしていたが、高田が徳利の産地となった背景には、「白粉土（しらこつち）」といわれる良質の陶土が産出された事が大きい。一方の小名田では、領主馬場氏が江戸への販路を開き特産品として徳利製造を奨励していた。しかし、当時の文書には「元来小名田徳利之義は、隣村なれども土症（性）違い出来方悪しく候に付・・（中略）・・馬場徳利之義は百箇に付弐分、三分ずつ下値にても捌け兼ね申し候に付、近来高田焼徳利多分抜買いたし、右小名田焼を其内へ交せ売り捌き来り候」（『多治見市史』窯業史料篇№166）と、小名田の陶土が高田よりも質が悪く徳利の出来上がりが劣っていたため、高田産の徳利を仕入れて小名田産に混ぜて出荷していたと記されている。嘉永３年（1850）には、高田と小名田合わせて年間 10 万俵の徳利が生産され、そのうちの 4 万俵が旗本馬場氏を通じて出荷されている。一方、小名田で１年間に生産される徳利は 3～4 千俵との記録があることから、近世の徳利生産量は小名田より高田の方が圧倒的に多く、しかも高田産徳利の相当量が小名田の領主馬場氏を通じて江戸へと出荷されていたとみられるのである。

2．近代の高田・小名田

▲近代の高田徳利（左：並徳利、右：首長徳利）　高田大ザヤ窯跡出土

明治時代になると、焼成前に筆書きで文字を入れたいわゆる「高田徳利」が生産されるようになる。高田は、近世に引き続き徳利に特化した窯業生産が行われるが、小名田は明治維新期から明治 20 年（1887）頃まで徳利生産が一時停止したといわれる。高田で産出される白粉土は、昭和 40 年（1965）代までは小名田を含め他地区へ出さないという決まりがあり、小名田では木節（きぶし）粘土に長石などをブレンドした粘土を使用したが、キレが多く出るなど焼き上がりの差もあり、徳利生産量はやはり小名田よりも高田のほうが多かった。そのような背景もあり、近代の高田徳利は、大きくみると高田の窯屋が生産し小名田の商人が販売するという構造ができあがったものと考えられる。

近代の高田徳利には並徳利と首長（くびなが）徳利の 2 種類の形状があり、容量は一升が一番多く、次いで五合、三合の３種類が基本だった。また、生産量はやや少ないが二升、三升、五升などの大物も作られていた。その他、遅くとも大正時代には樽形徳利、瓶形、漏斗台（じょうごだい）（上合台）が作られ、徳利２種を加えた５種類が基本的な生産品だった。

【高田徳利の製造・流通過程（徳利が家庭へ届くまで）】

土採り→成土

高田の場合
字白粉の地で採取した白粉土を打って細かくし、水と混ぜて粘土にした。

小名田の場合
小名田産の木節粘土を採取し、粘土工場で長石などとブレンドして調整した粘土がつくられた。

→

ロクロ成形

高田徳利の成形には専門のロクロ職人がいた。職人は窯屋をまわり、徳利のロクロびきを行った。

→

削り

ロクロ成形の数日後に高台の削り出しを行う。
削りは、職人と子供か女性による二人一組の作業だった。手ロクロの下部に紐を回し掛けて引っ張る、もしくは、２台の手ロクロを紐でつなぎ一人が片方のロクロを回転させるという方法で、職人の前のロクロを回転させ、削りが行われた。

→

乾燥（天日干し）

※素焼きはしない。

→

文字書き

文字書きは商人側の役割で、番頭や専門の職人が窯屋へ出向いて行った。屋号や電話番号を鉄絵具や呉須で筆書きした。

→

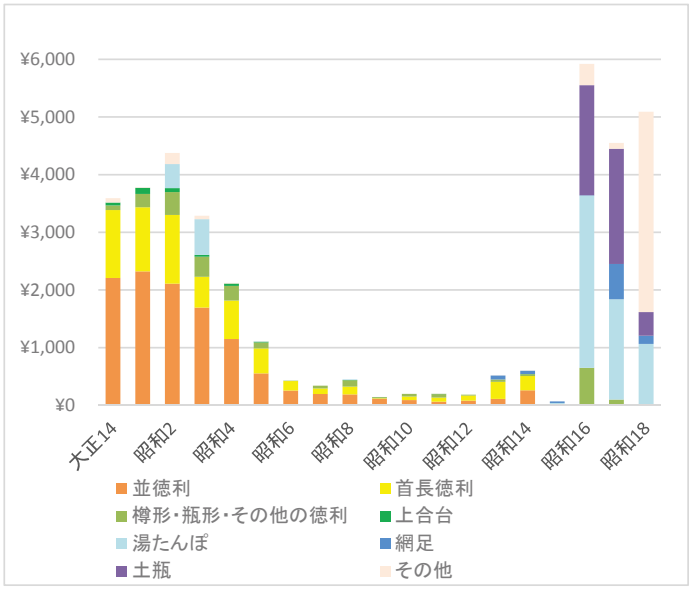
施釉・窯詰め

→

3．小名田商人・ヤマり堀江商店にみる高田徳利の生産と流通

高田徳利を販売する商人は、見本の徳利を鞄（「フウテンの寅さん」のようなトランクが多かった）に入れて東日本各地の酒屋をまわり、徳利に書く文字の注文を取ってくるという販売方法を取っていた。とくに明治 33 年（1900）に中央線多治見駅が開業してからは、鉄道利用によってその販売エリアは大きく広がっていく。

小名田のヤマり堀江商店は、高田から徳利類を仕入れ福島～関東地方一帯に販売した商人である。高田からは徳利類のほか、湯たんぽや網足（あみあし）（漁網の錘り）、燗徳利などの仕入れも行っていた。また、長崎県の波佐見地方から樽形徳利を仕入れ、関東へ出荷している記録もみられる。



▲ヤマり堀江商店の高田からの陶器仕入れ額の推移
『高田徳利勘定帳』を元に作成

▲ヤマり堀江商店
『高田徳利勘定帳』
多治見市図書館郷土資料室所蔵

堀江商店には、高田の窯屋からの徳利類の仕入れを記録した『高田徳利勘定帳』が残されていた。これは大正 13 年（1924）12 月～昭和 19 年（1944）の記録で、高田徳利が江戸期以来の好況を迎える関東大震災直後から、徳利需要が落ち込み生産終了に至るまでの 20 年間の高田徳利の盛衰が読み取れる。上の棒グラフは『高田徳利勘定帳』を元に、年別の仕入れ品種と仕入れ額を集計したものである。これによると、堀江商店の高田からの仕入れ額は昭和 2 年（1927）をピークに減少し始め、同 6 年（1931）には同 2 年（1927）の約 10 分の 1 にまで落ち込み、昭和 14 年（1939）を最後に並徳利と首長徳利の仕入れは完全になくなる。ただし仕入れ額は減少するものの、基本的な仕入れ品種は並徳利と首長徳利で、昭和 14 年までこの 2 種が全体のほぼ 8 割以上を占めている。また、堀江商店の別の文書（出荷帳）によると、高田徳利の最後の出荷は昭和 16 年（1941）で、以後は徳利の出荷記録はみられない。以上のように堀江商店の文書からは、高田徳利の需要が昭和 3 年（1928）頃に急激に減少し始め、昭和 15 ～ 16 年（1940 ～ 41）頃に生産終了を迎えたことが読み取れるのである。

▲樽形徳利
当初は長崎県の波佐見から仕入れて高田徳利と一緒に販売されていたが、山口県から来た職人が技術を伝え、高田でも作るようになったという。蹴ロクロで成形される。

▲瓶形
ガラス瓶に対抗した陶製瓶形容器。堀江商店の記録から大正 13 年には高田で作られていたことが分かる。昭和 10 年頃からは鋳込み成形で作られるようになったといわれる。

▲漏斗台（上合台）
樽から徳利へ酒や醤油を移すときに使う漏斗を、使用しないときに差し込んでおくための道具。酒屋や醤油店では、高田徳利とセットで必要な道具だった。

焼成

焼成は、薪を燃料とし数室の焼成室が連なる連房式登り窯で行われた。窯は、数軒の窯屋が共同で焚く共同窯だった。

検品

窯出し後に商人によって検品が行われる。水を張った桶に徳利を底から浸け、口から空気を吹き込んで泡が出ないか（水漏れがないか）を調べる。
小さな穴は、漆で埋めて補修し、出荷された。

荷造り→出荷

稲藁で俵状に梱包する。美濃には「荷造りさん」という専門の職人がいたが、高田徳利の場合、窯屋の奥さんや近所の女性たちも荷造りを行った。

多治見駅までは運送屋の荷馬車で出荷された。

鉄道輸送

多治見駅から鉄道の貨車に積み込まれ、東日本各地の鉄道駅へ輸送された。

酒屋など

樽から高田徳利へ漏斗で酒を移し入れて客に販売。
醤油や酢などの液体の量り売りにも使用された。

家庭

その日に飲む位の分量の酒を高田徳利で購入。空になった徳利を酒屋に戻して、またそこへ酒を入れてもらって購入する（通い徳利）。
酒屋の御用聞きが各家庭をまわり、注文取りと配達を行う場合も多かった。

4．高田徳利の終末～それぞれの選択～

昭和初期にガラス瓶が出回るようになり、高田徳利は打撃を受けたとされる。危機に直面し、高田の窯屋と小名田の商人それぞれが生き残りをかけてどのような道を模索したかをみてみたい。

▲土瓶（鉄瓶の代用品）
昭和 16 ～ 20 年

高田の窯屋の選択　昭和 7 年（1932）、高田工業組合によって「高田焼製品改良研究会」が発足し、徳利に替わる製品開発が検討されている。会の発足式議案には、「罐（びん）ト言ウ大敵ニ圧倒サレ文明ノ容器ニ打勝ツベキ方法更ニナシ・・（中略）・・当区ハ徳利ヲ以テ生命とナスモ、徳利以外ノ焼品ノ改良研究ニ没頭シテ、飽迄モ産業ノ改善ヲナサザル時ハ、前述ノ如キ自滅スルハ必然ナリ」と記され、ガラス瓶に押され高田徳利の需要が減少していることへの危機感が感じられる。高田では大正時代頃から網足、汽車土瓶、蒲鉾（かまぼこ）形湯たんぽの生産が始まっていたが、徳利の需要減少とともにそれらの生産量が増加したとみられる。さらに堀江商店の仕入れ記録によると、昭和 16 年（1941）からは金属製品の代用品として亀形湯たんぽや土瓶（鉄瓶の代用品）などの生産が本格化していることが分かる（前頁棒グラフ参照）。戦後は汽車土瓶、鶏水呑（とりのみずのみ）、野花立（のばなだて）（仏具）などが生産されたが、通い徳利の用途を持つ「高田徳利」は製造されなくなっている。高田徳利は、昭和 40 年（1965）代半ば頃より再び市場で人気を呼び、地酒や焼酎ブーム、民芸品ブームにより需要が急増し、排泥鋳込みによる徳利が高田・小名田地区で生産されるようになった。

▲昭和 32 年の高田、網足製造
加藤碩三撮影・多治見市図書館郷土資料室所蔵

◀左から
網足、亀形湯たんぽ、
汽車土瓶、鶏水呑

大正～昭和時代前半
高田大ザヤ窯跡出土

小名田の商人の選択　小名田の商人は徳利の需要が落ち込んでくると、盃や小皿などに顧客の店名や商標などに印を入れた商品（印物（しるしもの））を販売する「印物屋」へと転じていったとみられる。小名田の高田徳利を販売する陶器商で修行をし、大正３年（1914）に独立して多治見駅近くに出店した商人によれば、徳利が売れなくなると取引先だった酒問屋から酒の小売店を紹介してもらい印物の注文を取るようになったという。また、堀江商店では、昭和 12 年（1937）から高田徳利販売と併行して「年玉」商品の出荷を始めている。「年玉」が具体的に何かは確認できていないが、『年玉出荷帳』という帳面に記された取扱商品は、湯呑や丼、皿などで箱詰めのものが多く、さらに注文された絵柄が七福神や布袋、稲穂などの吉祥文が多いことなどから、商店等が年末年始に挨拶代わりに顧客に配布する品物、いわゆる「印物」のことだと推測できる。小名田の商人による印物販売は、高田徳利の取引先だった酒屋から始まり、醸造店、肥料店、喫茶店など次第に取引先を広げ、戦後には「印物屋」として大きく発展していく商人も多かった。　（春日美海）

▲印物の煎茶碗破片
高田大ザヤ窯跡出土

▲印物の銅版下絵
大正時代

主要参考文献
青木三郎　1980 『とっくりの歴史』。
神崎宣武　1982 『暮らしの中の焼きもの』日本人の生活と文化４　株式会社ぎょうせい。
神崎宣武　1984 『わんちゃ利兵衛の旅　テキヤ行商の世界』 河出書房新社。
田口昭二　1999 『高田大ザヤ古窯跡群発掘調査報告書』多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第 63 号　多治見市教育委員会。
多治見市　1976 『多治見市史』窯業資料編。
多治見市　1987 『多治見市史』通史編下。
多治見市教育委員会　2005 『堀江家文書目録』。

謝辞　青山双男、加藤与左衛門、水野忠治郎、
多治見市図書館郷土資料室　（敬称略）
※本誌は JSPS 科研費 25904008 の助成を受け行った研究成果を活用しました。

多治見市文化財保護センター企画展パンフレット
「高田徳利　～高田の窯屋と小名田の商人～」

●展示期間
文化財保護センター：平成 26 年 1 月 27 日（月）～ 6 月 27 日（金）
美濃焼ミュージアム ：平成 26 年 7 月 2 日（水）～ 8 月 28 日（木）

●発行　多治見市教育委員会・文化財保護センター
〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘 10-6-26
TEL(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033
URL http://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/

●発行部数　2,000 部（印刷費用 28,000 円）